

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 26 日現在

機関番号：35402  
研究種目：若手研究（B）  
研究期間：2009～2010  
課題番号：21730390  
研究課題名（和文） イギリス最古の株式会社社会計研究—ロンドン東インド会社における簿記会計の役割—  
研究課題名（英文） Accounting of the Oldest Corporation in Britain: The Role of Double Entry Bookkeeping introduced to British East India Company in 17th century  
研究代表者  
杉田 武志（SUGITA TAKESHI）  
広島経済大学・経済学部・准教授  
研究者番号：80509117

### 研究成果の概要（和文）：

ロンドン東インド会社に導入された複式簿記の目的及びその機能を検討するため、ロンドンの大英図書館に所蔵される最古の元帳 B（1664-1669 年）から 1700 年前後まで現存する元帳、普通仕訳帳、現金仕訳帳及び、同社の議事録などを複写した史料を中心に考察を行った。主に勘定組織および帳簿組織の観点から、個別の商品勘定、人名勘定、私貿易勘定、資本勘定、残高勘定、損益勘定を取り上げるとともに、複式簿記の持つ損益計算機能についても検討している。また、商品の棚卸評価の問題に着目して、期末商品が売価評価される意味と複式簿記の損益計算機能との関連も『會計』誌上などで論じた。さらには同社を取り巻く経済的、社会的環境として当時の貿易状況、法律の制定、同社が直面した英蘭戦争、出資者の構成などからも、当時の簿記会計へとアプローチした。一連の考察の結果、同社では、複式簿記の持つ財産管理などのために、複式簿記の導入が行われたと考えられる。

### 研究成果の概要（英文）：

The aim of this research was to investigate the reason of introduction of Double Entry Bookkeeping to The British East India Company. Ledgers B~K (1664~1713) of the British East India Company was intended for this research.

I drew focus to accounts system and accounting books system, e.g. Merchandize accounts, Personal accounts, Private Trade accounts, Stock accounts, Balance accounts, Profit and Loss accounts in those Ledgers, and focus attention on inventory valuation at Ledger balanced. In addition, this research approached about the background of economic and social history, particular East India trade, Anglo-Dutch Wars, Laws, and stakeholder to examine Bookkeeping and Accounting of the British East India Company.

Throughout the course of this research I found that administration of property was important for the role of Double Entry Bookkeeping.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：会計学

科研費の分科・細目：経営学・会計学

キーワード：会計史，財務会計，会計学，東インド会社，複式簿記，財産管理，売残商品

### 1. 研究開始当初の背景

東インド会社は、イギリス史において重要な存在であったことから、同社の史的 연구には膨大な先行研究が存在しており、それらは極めて多くの領域にわたっている。とりわけ、貿易、流通、植民地支配、帝国史として表れるように経済史、経営史の領域における研究は本研究が目指す会計史研究に比べて、その数が多い。

他方、会計史の領域では、1970年代に入り、ようやく J. O. Winjum, V. Baladouni, 茂木虎雄教授たちにより、東インド会社の研究が本格的に進められるようになったばかりであった。そのため、1900年前後から本格的に進められてきた経済史の研究などに比べると、その蓄積は少ない。

しかも、Winjum [1972], 茂木 [1994] においても、本研究の目的にあるような、1664年8月に導入された複式簿記が同社にとって如何なる目的で導入され、如何なる役割を果たしたものであったのかについては具体的な指摘が行われていなかったのである。

### 2. 研究の目的

本研究は、イギリス最古の株式会社であるイギリス東インド会社、とりわけロンドン東インド会社における複式簿記が(1)如何なる目的をもって導入されたのかを、1664年の複式簿記導入をめぐる理事会の議事録、複式簿記導入の最終草案、およびそのときの会計帳簿を考察することによって、明らかにしようとするものである。あわせて、(2)実際に導入目的に即して複式簿記が運用されているのかを検討し、17世紀の同社における複式簿記の果たした機能を包括的に明らかにすることも目的としていた。

### 3. 研究の方法

研究の方法は下記(1)～(3)のとおりである。

#### (1) 史料収集

本研究の目的を遂行するために、史料が所蔵されるロンドンの大英図書館に史料の複写依頼を行った。具体的には、ロンドン東インド会社の複式簿記導入に関する議事録などとして、複式簿記導入をめぐる1664年7月、8月に行われた理事会の協議内容、8月に理事会に提出された複式簿記導入の最終

草案と、同社の元帳 G, H, J, K とそれに対応する仕訳帳等を入手した。

#### (2) 先行研究のレビュー

史料が手許に届くまでには、予想通り、数か月以上も要したものがあつた。史料入手までに、先行研究のレビューを実施した。

とりわけ、研究対象となる17世紀当時の簿記の意義、役割、あるいは導入目的について概観した。これは、東インド会社と同時期に用いられた簿記技術と比較することで、その導入目的や機能をより鮮明にすることを目的としていたからであつた。

#### (3) 史料批判

史料入手後は、1664年の複式簿記の導入をめぐる理事会の協議内容と複式簿記導入の最終草案を翻訳して整理した。それから、複式簿記のルールを示したと考えられる最終草案とその直前に行われた理事会の協議内容を比較検討し、実際に理事会の協議内容が最終草案に反映したものであるかについて考察を行った。

さらに、会計帳簿の検討に関しては、主に勘定組織および帳簿組織の観点の他に、複式簿記の持つ機能、つまり損益計算機能および財産計算機能の観点からアプローチを試みた。その過程で、1664-1713年まで記録された各元帳を対象として開始手続き、締切手続き、および期末評価の問題について焦点を当てて考察を行った。

### 4. 研究成果

本研究の成果として、中間報告を日本会計研究学会で発表し、最終的には論文として雑誌『會計』、本学の紀要においてその成果を公表している。

具体的には、『會計』では、棚卸商品の評価方法を検討することで、評価替えの結果、増加する商品評価額の意味合いや評価替えにより生じる損益と配当との関係、つまり配当可能利益の計算などについて検討し、複式簿記の目的へとアプローチしている。

なお、その過程で、個別の商品勘定、人名勘定、私貿易勘定、資本勘定、残高勘定、損益勘定、さらには同社を取り巻く経済的、社会的環境として当時の貿易状況、法律の制定、同社が直面した英蘭戦争、出資者の構成なども取り上げて考察した。

一連の考察の結果、同社ではこの当時、複

式簿記の持つ損益計算機能よりも、むしろ財産計管理の役割を重視して、複式簿記の導入が行われていたと思われる。本研究が試みたアプローチ、ならびに、ここで得られて知見は、先行研究でもほとんど議論されることのなかったものであった。

今後の展望として、引き続き、研究期間は終了しているが、研究成果を引き続きまとめ、論文として公表していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 杉田武志, 17世紀イギリス東インド会社の会計帳簿の実証分析 - 売残商品の売価評価とその背景 -, 会計, 査読無, 第178巻, 2010年, 32-46頁。
- ② 杉田武志, ロンドン東インド会社の元帳B-D (1664-1673年) における売残商品に対する評価, 経済研究論集 (広島経済大学), 第33巻第1号, 2010年, 83-87頁。

[学会発表] (計 1 件)

杉田武志, 17世紀ロンドン東インド会社における売残商品評価方法-払出単価に基づいて売残商品の評価する背景-, 日本会計研究学会, 2009年9月3日, 関西学院大学。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

杉田 武志 (SUGITA TAKESHI)  
広島経済大学・経済学部・准教授  
研究者番号: 80509117

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: